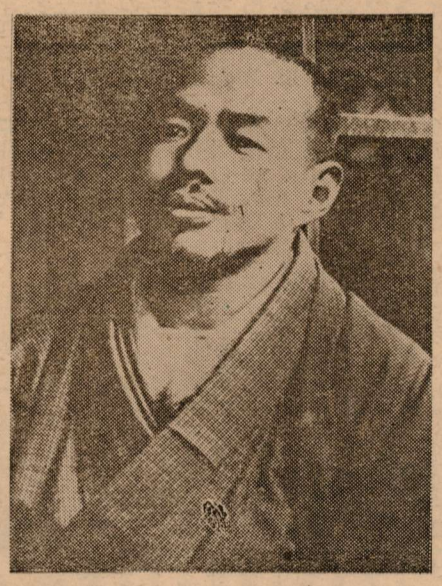
東郷村報

昭和28年9月17日
發行所
宮崎縣臼杵郡
東郷村役場
日向市富高新町
株式會社 安藤印刷所
電話64番

牧水祭記念号



若山牧水先生

ふるさとの
尾鈴の山の
かなしさよ
秋もかすみの
たなびきて
居り

牧水祭記念号発刊にあたりて

牧水顯彰会長　小野弘

燈台は高ければ高い程その影は廣く大きい。亦人間はその蒙る影響が偉大であればある程その恩惠を忘却しがちである。牧水先生が明治十八年八月二十四日私達の村で生れ昭和三年九月十七日沼津市千本松原蔭の家に永眠されるまで四十四年間の業績は誠に偉大であり歿後二十六年を經た今日仰げば愈々高い燈台の様な感じである。牧水先生は東郷村の名前と共に日本の山河がつゞく限り吾々は永久に忘れることの出來ない存在となつている美しい山河の中に生をうけ乍らその美しさを知らず偉大な歌人を生み乍らその恵みを知らず空なしく生を終ることは誠に不幸である。

牧水顯彰會は東郷村に於けるさゝやかな文化國休であるが、然しその持つている光りを何時までも乏しい小さな光りにしておきたくはない。

軈て日向の隅々を否な日本の隅々を遍く照す光りにしたいと念じている次第である。

牧水祭

一、期日　九月十七日
一、場所　歌碑前(坪谷)
　　坪谷中學校
一、行事
(1) 學童音樂會　前 九、三〇～一〇、三〇
(3) 歌碑祭　一一、〇〇～一二、〇〇
(3) 牧水先生を語る座談會　後 一、〇〇～二、〇〇
(4) 短歌會　二、〇〇～二、三〇
(5) 祝賀會　二、〇〇～二、三〇
(6) 遺墨遺品展、學童作品展　前 九、〇〇～後 四、〇〇

追慕のおもひ

若山喜志子

風の匂ひ草木の色もさながらに三とせの秋はめぐり來しかな

この一首は、いまを去る二十數年もの昔、故人の三回忌を迎えた日私の詠んだものであります。

それから後もずつと毎年九月といふ月になると、この同じ思いを繰返し、九月よ、ああ九月のあの日あの時よ、日光はやはり今日のやうに明るく照つていた、風の動きも草木の色もやはり今日見るこの色であり匂いであつた。

それなのに……と思ふとそのたびに私の胸は冷たい双物にえぐられるやうな生ま生ましい痛みに疼くのであります。そしていよいよ追慕のおもいは幅廣く深まりまさるのみであります。

ですから私はいつの間にか九月といふ月の名を苦月と稱ぶやうになつてゆきました。實際私には九月といふ月は苦月なのであつて、この月に入ると一層何かしらの煩ひ事が出來て來て心弱い私はそれに苦しみ、余分な煩を背負ひながらいつも心重く忌を營んで來ていたやうに思はれてなりません。それに大抵の事は自宅にいてではなく、どこか他所での營みに出かけて、そこで多くの人たちと一緒にいながら、何かしらの心遣ひをしながら營んで來ていたのであります。

昨年ははからずもその生地坪谷に盛大な牧水祭というが催されましてそれにわざわざの御招きを受け、何年ぶりかの生家を訪はせていただき　さながら故人の靈のさまよつているかの懐しい山川の姿に接し、また心厚い故里人の多くにお遇いし、終始一貫深い感激と感謝の念に浸らせられて、至極短い時間ではありましたが、まことに充實した日を過させていただきました。今でもそれを思い起すと、あの周圍をとりまいていた自然の風光のさまざま、人の誰れ彼の面影がまざまざと身近に浮び出て來て心の溫まるおもいがいたします

そして私はあらためてつくづく故人のしやはせを美まずにはをられません。

私は今年の春以來ずつと健康を損ねていたため、生れ故郷の信濃の山の湯に來て靜養につとめてをりましたが、おかげで次第に快癒に向い昨今では殆ど全快の狀態に復しました。

それなのに尙私は此處が離れ難くて何時までも滯在をつづけてをります。それは一つには此處の自然が私をしん底から愛しいたはつて抱きとつていてくれるからでもありますが、それよりも尙大きな理由は、私自身止むに止まれぬ自己凝視の道場を此處に見出したからのことであります。そしてその凝視の大半は故人へのそれへ必然的に深いつながりを有つものであつて、それを知つてから私は自分の不健康を悲しむ思ひも一層眞劍になり、必死のおもひで攝生を怠らず、二ヶ月三ヶ月の時を經て來たのでありました。幸いにしてこのごろではその不安は去りましたが、さうすればなほのこと、この一人のこの對決的凝視を欲する欲求が無限に湧いて來て、この頃では他人目にも何か異様に映るらしく、普通の靜養だけの浴客ではない。といふ目で見られるやうになつて來てをります。

私はこれまで永い年月の間――それは止むに止まれぬ一つの宿命的とも云へる現實との嚴しい闘ひの障碍にさへぎられていて――故人に泌々と直面する余裕ある時を持ち得ずに過ぎて來たことの悔を、このごろになつてはじめて胆に銘じて悔い得る時を與へられるやうになつて、その欣びに目もくらむ思いを体驗しつゝあるのであります。けれどもさうしていながら時にはこの現在の自分を冷靜に批判して見ては、曾て悲痛の涙にくれながら詠んだ、

すがやかに往き過ぎまししはこの道か辿りつつい

まだ辿り得なくにの嘆きを繰り返さざるを得ず、そして常に自分の前方には永遠の彼方に向つて果しも知れず去つて行く人の後姿を見つめながら、飽きることを知らず追いかけている自分を見出すのであります。

このやうな事を書けば、それは際限もなく一つの繰り言になつてゆくので、それは紙數にも制限のあるこの場合慎まねばなりませんので、ここにはそれをいたしませんが、兎に角私は、そんな風な生き方をこのごろになつて始めていることをこの機に一筆書き記したのであります。　以上

昭和二十八年九月二日
信濃山中の佗しき湯宿にて
記す

山鈴尾ため眺りよ家生

東郷村と牧水先生

大悟法利雄

私は牧水研究を始めて以來かなり頻繁に東郷村を訪ねて居る。戰後再び東京生活にかえつてからでも毎年大抵一度は出かけていて、今では何だか自分の故郷でもあるかのような氣がする位で日向とか牧水とか聞けばいつでもその美しい山川の姿をまざ〳〵と目の前に思い描くのが常である。

耳川本流も、それから坪谷川の流れも牧水先生の少年時代に較べればひどく淺くなつてしまつたのらしいが、それでも牧水先生をはぐくみ育てた、そして生前の先生があれほどまでなつかしんでいたあの山や川はまことに美しい。山陰から坪谷、その奥の方は私は鬼神野あたりまでしか行つたことはないが、あの坪谷川一帶の溪谷は「牧水溪」とでも名ずけたいような氣のする傑れた溪谷美である。

東郷村の人たちはそのことをよく知つて居るだろうか？私はあの美しい山川の姿が願わくは今日以上に荒るるなかれと祈らずにはいられない。

私が沼津の牧水先生の膝下にあつた時のことだが、ある日先生は私と二人でTさんという歌人の噂をして「あの町がT君を生んだということは大臣などを出したよりももつと名譽なことなんだがネ」と、しみ〴〵語つた。Tさんというのは牧水門下の古い人で、地味だけれどなか〳〵いい歌を作つた人である。そしてその話はもう三十年も前、大臣の價値がまだ現在のように下落せぬ時のことだつた

Tさんを生んだことが大臣を出したより名譽なことであるならば、牧水先生を生んだことが總理大臣など出したことなど比較にならぬほど名譽なことは勿論でその点東郷村は大いに自慢していいわけである。

東郷村の人たちはそれを十分によく理解しているだろうか？

石をもて追わるるごとくふるさとを出でし悲しみ消ゆる時なし

これは牧水先生も親しかつた石川啄木の歌である。先生は決して「石をもて追わるるごとくに」故郷を出たのではなかつた。しかし早稲田大學を出て實社會に出てからの先生は坪谷に歸ることは極めて少く、故郷との關係はかなり疎遠であつた。

先生にとつて山や川はなつかしいけれど、村や村人たちはどちらかといえばうとましいものでさえあつたようである。それは村人たちが先生を理解しなかつたためだとも言い得るが、しかし先生の生活やその生涯を靜かに省みるとき、文學とか藝術とかにさして關心のない人々が理解し得なかつたのは無理もなかつたと思う。晩年にはよほどちがつて來ていた。そして先生歿後二十五年の今日、歌碑も出來その生家のよく保存されていることなどを思えばまことに今昔の感に堪えない。これはその家をついでいる陶山氏や、それから小野村長其他よき理解者の功が大きいけれど、何といつても村民一般の理解なしに出來ることではないのだ。しかし現在の程度でまだまだ十分だとはいえない。

牧水先生くらいになれば廣く外に向つていわゆる顯彰運動をやることはあまり必要ではないと思う。

私たちが鄉土の人々に望むのは何よりもまず遺跡や遺品の出來るだけ完全な保存である。先生が自ら建てて最後に住んだ沼津千本松原の蔭の家は戰災のため完全に燒失したしその他沼津や東京で先生が住んでいた家も大部分燒けてしまつた今やほんとうに先生の遺跡らしい面影をとどめているものは坪谷の生家たゞ一つ。あの生家だけは何とか[illegible]言つてもよい位であら幾人すこしでも完全に後世に殘はしたいものである。それ[illegible]を谷の小學校か公民館あたりに「牧水文庫」をこしらえて先生關係の著作や雜誌や遺品などを出來るだけ多く集めて保存するようにして貰いたいと思う。これは東郷村の人々の深い理解と大きな努力にまつほかはないが、勿論私たちもそれには出來るだけの應援はするつもりである。

牧水先生の一生

明治大正昭和の歌壇を通じてわが若山牧水先生ほど廣く一般から敬愛されて居る歌人はあるまい。昭和三年沼津千本松原の蔭の家に長逝されてから既に二十六年先生の歌は益々ひろく愛誦されて

幾山河越えさりゆかば寂しさのはてなむ國ぞけふも旅ゆく

白鳥はかなしからずや空の青海の青にも染まずたゞよふ

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒は靜かに飲むべかりけり

うす紅に葉はいちはやく萠えいでて咲かむとすずの山さくら花

といふやうなその代表作は今や殆んど誰れ知らぬ者もないといふ位にまでなつている。牧水先生こそは日向の最大の誇であり、先生を生んだことによつて東郷村は永遠に文化日本の聖地の一つとなつたのである。

牧水先生は明治十八年八月二十四日坪谷に生れた。當時父立藏は四十一才母マキは三十八才であつた、そして先生にはスヱ、トモ、シヅの三人の姉があつた。

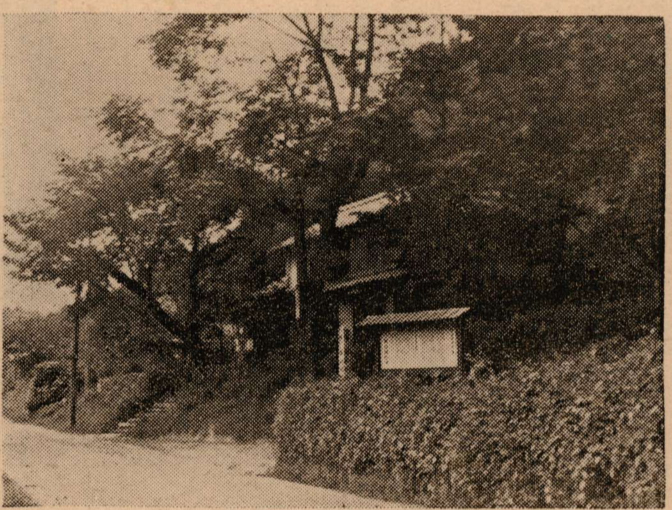
先生五才の年に一家を擧げて隣村田代の小川部落に移つて行つた、八才の春を迎え田代尋常小學校に入學したが學校は一里近くも離れていて子供の通學には不便であつたので義兄今西吉郎が校長をしている羽坂尋常小學校に轉校し山陰の叔父純曾の家から通學することになつたがその秋一家と共に坪谷に引揚げ坪谷尋常小學校に入學した。

明治二十九年三月坪谷尋常小學校を卒業したが當時東郷村には高等小學校がなかつたので父母の膝下を離れ延岡高等小學校に入學した、そして土地隨一の文章家として知られた受持教師日吉昇に愛され二年頃から村井弦齋の「小猫」だとか「櫻の御所」だとかいうような小説を讀み耽るようになつた。

明治三十二年高等小學三年を修業した年に初めて縣立延岡中學が設立されたので入學試驗を受けて合格、二年生頃から盛んに文學書に親しむようになり三年生になつてからは散文を書いたり歌や俳句を「中學文壇」やその他の雜誌に投稿しはじめ三十五年には級友と、「曙會」を起し「曙」という回覧文學雜誌を出し當時宮崎から出ていた「日州獨立新聞」に盛んに投書し初め翌年からはまた「野虹」という回覧の短歌雜誌を出しはじめた、中學時代は「桂露」「雨山」「白雨」「野百合」というような雅號を順次に用いていたが三十七年の初めあたりから「牧水」を使ひはじめた。母親の名マキと水と當時最も愛していたもの二つを取つたのである。

明治三十二年春二十才で中學を卒業四月上京して早稲田大學文學科高等予科に入學しまもなく尾上柴舟先生を師事し柴舟先生を中心に正富汪洋、前田夕暮等と車前草社を結び雜誌「新聲」にその作品を發表するようになつた。

明治四十一年七月早稲田大學英文科を卒業した卒業と同時に處女歌集「海の聲」を出版した年二十四才、明治四十三年に第二歌集「獨り歌へる」「別離」相ついで出版した。「別離」によつて一躍歌壇の花形となり同じ柴舟門下の前田夕暮と歌壇に新しく牧水夕暮時代を畫するに至つた。


生家

四十二年七月に中央新聞社社會部に入つたが年末には退社また四十四年十二月やまと新聞社會部記者となつてみたがこれも二ケ月足らずでやめてその後はどこにも就職することなくその一生を殆んど歌のために捧げつくしたのであつた。

先生が喜志子夫人と結婚したのは明治四十五年五月であつたがその年七月には父危篤の電報に接しあわたゞしく歸省した父の病氣はしばらく小康を保つていたが十一月十四日行年六十八才で遂に長逝した。七月の歸郷以來近親たちからは郷里にとどまつて就職するようにすゝめられていたが父の死後は更に強く求められて進退に迷い翌大正二年五月遂に意を決して出郷するまでひどく苦悶懊惱した、「ふるさとの尾鈴山の」の歌もこのときの作である。

その後先生は常に歌壇の第一線にあつて活躍していたけれど詩人の常としてその實生活は甚だ惠まれず母に僅かの小遺を送る余裕さへない始末だつた。大正九年沼津に移つてからはいくらか落付いて來たし母を何とかして沼津に引とつて一緒に暮さうと考えたが年老いても氣丈な母親はなかなかそれに應じなかつた。

大正十三年先生は亡父十三回忌の法要を營むために歸省した。實に滿十一年ぶりの故郷であつた。

いま坪谷神社に殘つている「うぶすなのわが氏神よとこしへに村のしづめとおわすこの神」という額や、裏面に「矢野寅吉おぢやんに贈る歌　おとなりのしげ坊」と記した。

おとなりの寅おぢやんに物申す永く永く生きてお酒飲みませうよ

という愉快な短冊などの揮毫はこのときのものである。

牧水はその後短冊半折等の揮毫頒布會を各地に催して得た金で沼津千本松原の藤に土地を買い家を建て以前からずつと主宰發行していた「創作」の他に詩歌綜合雜誌「詩歌時代」を發行したがその雜誌のために少からぬ負債が出來更にずつと揮毫頒布旅行を續けねばならなくなり遂に北海道、朝鮮まで出かけた。先生がその次に歸省したのは昭和二年の朝鮮旅行の歸途大分延岡での揮毫頒布會をすましてからで七月二十五日に喜志子夫人同伴で坪谷に歸つたのであつたがこの時は非常に疲れきつていて半病人の有様それでも父の墓參をしたり郷里の寫眞十數枚を撮らせたりなどして二十九日土々呂港を出帆したがこれが最後の歸省であり翌三年九月十七日沼津千本松原の藤の家で永眠、同地濱道乘運寺の墓地に埋葬されたのであつた。法名「古松院仙譽牧水居士」

主なる著書

海の聲、獨り歌へる、別離、路上、牧水歌話、死か藝術か、みなかみ、秋風の歌、砂丘、旅とふる郷、朝の歌、和歌講話、白梅集、溪谷集、さびしき樹木、海より山より、比叡と熊野、批評と添削、くろ土、靜かなる旅をゆきつゝ、短歌作法、山櫻の歌、小さき鶯、みなかみ紀行、樹木とその葉

大悟法利雄著「牧水先生と郷土」より

若山牧水先生と阿蘇

黒木傳松

九月十七日は若山牧水先生の第二十五回忌である。昭和三年四十四才で亡くなられたのだが、最後に逢つたのは大正十四年秋、一緒に阿蘇に登つた時で先生四十一才であつた。

私は先生と十五ちがひだからあの時二十六だつたわけで、その先生の沒年を遙かに越えた今考へてみても、牧水は年の割に老けていたナアと思ふ。尤も、あの『幾山河越えさりゆかば寂しさのはてなん國ぞ今日も旅ゆく』といふ歌を既に二十三歳で作つた人だし、歌集十五冊、散文集童謠集など數十冊の本を著しその時代の青年の血を湧かせた人だから四十四で死んだとは言つても精神年齢は遙かに進んでいたのであつて、一生に爲すべき事を爲遂げて死んだと思つていいのかもしれないしだからおのずから大人の風格があつて年齢より老けて見えたのであろう。

大正十四年十一月、熊本では眞崎白城氏の家が宿で新聞社主催の盛大な短歌會があり當時の市長辛島知己氏のうちにも行つて「創作」熊本支社の歌會をし、縣産の銘酒各種を並べての接待を受けた。阿蘇に行つたのは靜かな湯の宿で半折を書く爲のものだつたか、先生夫妻に、九州日日新聞の後藤是山氏とT君と私とが同道した、栃木溫泉小山旅館での歌に『散りすぎし紅葉を惜しむ霜月の栃の木の湯の靜かなるかも』『夜半ひとり目さめてをれば靜けさや湯瀧のひびき溪川の昔』などの五首があるし、眞崎氏宅での歌に『阿蘇が嶺に白雪ふりぬ昨日こそ登り來にしか白雪降りぬ』が殘つている。

生誕碑

登山には小山旅館から案内の人が獵銃を持つて行つた。今のやうに登山バスはなかつたが喜志子夫人も共に元氣で噴火口をのぞみ草千里から湯の谷へ下る。湯の谷から少し降つた邊だつたと思う、二、三軒の人家があつて葉のまばらな榎の梢にひわ、か何かの小鳥が群りとまつている。牧水は「ちよつと」と言つて獵銃を借りた。木の梢にむけて狙ひをつけドンと撃つた、銃口から青い煙が出て二、三羽ぱらぱらと落ちて來た落ちた小鳥の行方を見定めて私達が捜しに行かうとしている、と側の家の裏口から白髪の老婆が出て來て『いま、うちに、子の出來た所じや、そぎやん、むげこつば、せんばナ』と悲愴な顔をして叱り付ける――牧水は老婆にむかつて輕く頭を下げた。

北原白秋の文章に「一緒に散歩した若い歌人が燕に石を投げつけたのを見て、そんな情の荒つぽい事でいい歌の出來る筈はないと苦しく思つた」といふ意味のがある。三年たつて牧水先生が亡くなられ、追悼會の折にT君が『先生があの時鐵砲で小鳥を撃つたのは殘酷だと思つた』と言つたのだが、私は違つた意見であつた。牧水が自然兒として自由に振舞つた姿であつて却つて面白いのではないかと思つたのである。既成道徳觀念に繫縛せられない自由な世界、とらはれざる心、が良いと思つたのである。

牧水は宮崎縣細島港から七里山奥の東郷村坪谷という村に育つた自然兒である子供の頃は木のてつぺんに登つていて小便を飛ばしたこともあろうし、谷川の石を起して魚を獲り、山に罠をかけて兎もとつたろう。牧水のうたが雄渾な調べをもち、根本に線の太さがあるのはその自然兒の聲だからである。勿論、一代の歌人として神經の行届いたこまやかな情愛が心に溢れていた事は、嘗つて一たび牧水に面接したものはその朗々たる風格に魅せられて一生忘れ得ないというので解ると思ふ。

歿後二十五年、先生のうたを石に刻んだ歌碑が全國に十四ケ所、今年は、生地宮崎縣東郷村の牧水祭に喜志子夫人と大悟法利雄君が西下している、あの尾鈴山麓の東郷村、私もそこに生れたのだが今村をあげて牧水を仰いでいる事であろう

阿蘇が嶺の枯萱野邊をたたへつつ杖を振りふり行きし君はも

東京麹町時代

海野実門

◎＝彼と僕と＝

「君も東郷村だつてね」「ウン、だが日向ぢや一遍も逢へなかつたね」「そうよ、四つ年齢の差が逢はさなかつたのだ君は當時縣下で唯一の宮崎中學、僕は四年遅れてできたての延中へ入校したので……是からお互仲好く頑張ろうぜ――それにしても茲合宿所ぢや大勢ザワついて勉强ができんドコかへ一緒に引越さうよ」

牧水と僕とは一見旧知の如く、麴町英國大使館脇の「延岡郷友會」―（内藤子爵特設の旧藩内學徒合宿所）を出て、九段の靖國神社横の富士見町、常盤館―（名は立派だが余りハエない素人下宿で只閑寂なのと、二階の富士の遠望を取柄に）二階に机を並べて陣取つた。當時彼と僕は前後して早稲田″へ入學のホヤ〳〵だつた。

◎＝入選蕎麥＝

當時既に歌道に精進して牧水は「萬朝報」（短歌選者、鳳晶子）に盛んに應募して入選していた、入選者は賞金が入ると必ず二人前の[illegible]

◎＝雅号″牧水″の由來＝

明治三十七年一月十六日附[illegible]（了）

信州の旅

小野弘

信州は少年時代からの憧れの土地である。

それは藤村、牧水先生に影響する處もすくなくないが高原の輕井澤、活火山の淺間山、小諸の懐古園、うたの千曲川等夢に描いた懐しさからでもある。

案内して戴く大悟法さんと東京の上野驛を發つたのが六月の末方それも夜の十二時近くである。混雜する汽車の中にようやく席をみつけてやれ／＼と腰をおろすと連日のつかれが一時に全身に融けて赤羽、浦和、高崎と夢の中を汽車が走る。碓井峠を越ると夜が明けはじめ高原の冷氣がだん／＼と身に泌みてくる。明るくなつた汽車の窓から外をみると濃霧のために咫尺を辨じない降りつゞいた雨は今日も亦雨かと思ふ、時々霧につゝまれた大きな唐松や雜木林が眼前に現われたり消えたりする。

七月の聲をきこうと云ふのに青い麥が立つたまゝ霧に濡れているのも珍らしい。

上野から五時間汽車は輕井澤驛に着く、このあたりでは汽車の停車時間が大低拾分位である。驛では溫い蕎麥を賣つているので朝食がわりに大急ぎで蕎麥を食ふ色の黑い素蕎麥だが食つてみると案外美味い。東京の蕎麥も美味だが信州の蕎麥は素朴のうちにこれがほんとうの蕎麥の味だと思ふ。

輕井澤は夏の避暑地として別莊も相當あるらしいが今朝は霧のためそれらしいものは一軒もみえない。霧の中にそれ等を想像してみるだけである。

沿線には處々水田があつて既に田植が終つている。九州も田植の最中にちがいないとふと故郷のことを思い出す。

「ここあたりから淺間山がみへますよ」と大悟法さんは云ふ。たちこめた霧の中ではそれらしい何物もなく殘念乍ら割愛せざるを得ない。これでたのしみにしていた一つの夢が消えたわけである。

輕井澤から沓掛、御代田を通過して約一時間汽車は小諸驛につく、草深い田舍街かと驛に立つてみると仲々立派な街である。

朝が早いので人影は少くない。小諸の街は淺間山麓なので街全体が傾斜である驛から左に折れて懐古園へ急ぐ、今日の中に白骨溫泉か上高地までゆきたいからである。

驛から五分程して園の三つ門につくお寺の山門を思わせる様な大きな門があつて中央に懐古園の大額がにぶい光りを放つている。

門をくゞると廣場にでる。こゝから城趾である。鬱蒼とした樹々の間に古るびた石垣がつゞく小さな坂を登つて一寸した廣場に出ると繁つた櫻の木の中に戰歿碑がみゆる。その傍の石垣の中に特別大きな石があつてその石に、

かたはらに秋草の花かたるらく
ほろびしものはなつかしきかな

（詩碑原文）

陶山氏所藏

のうたが刻み込まれてある牧水先生の歌碑である。

牧水先生が初めて小諸へ來られたのは明治四十三年九月で當時二十六歳の多感な時代であつたと云ふ、九十日余りの滯在中に懐古園や千曲川のほとりを逍遙したり淺間山にも登り附近の溫泉等を巡つて詠まれた歌九十余首が歌集『路上』に收められている。その中の一首がこの歌である。

古るびた歌碑をみていると懐しいものがこん／＼と湧く、九州と信州を繋ぐものそれは勿論土地でもある。然しその土地に血を通わせるものは人である。牧水先生が歩るかれた土地。歌碑まで立つた小諸が私には次第に故郷の様な親しみを感じてくる。

暫く歌碑の前にたゝずんでいたが去りかねる心をすてゝ展望台へでる。

この途中に有名な藤村先生の詩碑がある。大きな自然石の中に銅板をはめて、千曲川旅情の詩が浮彫にされてある。

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
みどりなすはこべはもえず
わかくさもしくによしなし
しろがねのふすまのおかべ
日にとけてあはは雪流る
あたゝかき光はあれど
のにみつる香もしらず
あさくのみ春はかすみて
むぎの色僅かに青し
旅人のむれはいくつか
畠中の道を急ぎぬ
暮れゆけば淺間も見えず
うたかなし佐久の草笛

千曲川いざよう波の岸ちかきやどにのぼりつ
にごり酒にごれる飲みて
草枕しばしなぐさむ

（詩碑原文）

大悟法さんは高々と朗詠される、この詩碑は昭和二年に建立され除幕式には牧水先生も出席して朗詠をするのだと樂しみにしていられたが朝鮮旅行のため參列が出來なかつたそうである。

一人の詩人が世に及ぼす力は大きい。

小諸の歴史から藤村、牧水先生を去つたら誠に淋しいものになるだろう。遠くから小諸へくる人達は皆これ等の詩情を求めているのである。

展望台に立つと遙か幾百尺の下に蜿蜒とした千曲川が流れている。久しく待望した川である。綠に萌えた山々も美しい

秋風のそら晴れぬれば千曲川
白き河原に出てあそぶかな

（牧水）

信州の美しさはこの川を除いてはない

一見平凡な川も旅情をこめてみればなつかしいものである。まして詩情豊な川であれば尙更である。

園内は今公園化されて色々な施設があるが余り人工を加えるとかえつて生命をなくするのではないか。

園内にある深草亭草廬に牧水先生の旧友宮坂古梁さんを尋ねた。元小諸町長も勤めた人で六十を越した溫和な風貌は始めて逢ふ人の様な氣がしないのである。話は牧水先生のことで盡きることを知らない。話こんでいると、大悟法さんが「郭公が鳴いていますね」と云ふ、ぢつと耳をすませると直ぐ近くの森らしい、甘い柔い聲で「カツコー」「カツコー」と上品になく、減多にきかれない聲だそうであるが、私はそれをきいたのである。

こうした聲をきくと總ての鳥のなき聲を吟味したくなる。

再び街に出て宮坂竜齊と云ふ彫刻師を尋ねる、この人は古梁さんの弟で藤村牧水先生の詩歌の彫刻を業にしていると云ふ。その凡菜は全く名人らしく出來あがりの品も欲しいもの許りである。無造作に積まれた白樺の材料も私には珍らしくみえた、土產にと三枚の彫刻物を送付して貰ふ樣依賴して汽車で長野へ發つた。午前拾時である。

牧水先生と坪谷中学校

坪谷中學校長　平田廣司

坪谷中學に赴任當時或人が『坪谷の子供には牧水先生の様な偉い人の種が一ぱいあるのですから教育さえ立派にいけば素晴しい人材が續出する筈です。頑張つて下さい』と言われた事があるが、この信念こそ教育の出發点であると思います。

東郷村の新しい歴史を作り村民にこの誇りと信念を與えられた牧水先生に村民は心からの感謝をさゝげています。

特に孝心の深かつた先生が東京の空から老いて一人います故郷の母の身を案じて日向の國むら立つ山のひと山に

住む母戀し秋晴の日や
ふるさとの美々津の川の
みなかみに
ひとりし母の病みたまふ
とぞ

と詠まれた美々津の川のみなかみに當る坪谷川を俯瞰する先生の生家に隣接して村が新しい中學校を建設された事に對しては教育に對する深い考慮も思われて心からの敬意を拂うと共に本中學校のかゝる恵まれた環境の中に教育に從事出來る事を喜びとし又誇りとするものであります。

學校の窓から朝夕仰ぐ尾鈴山の景觀に就て先生は『元來この尾鈴山はその南面の大平洋に臨んだ方が極めて、なだらかな傾斜で高まつてきて四千尺近い頂上となり急に北に面して削り落した樣に岩骨を露はし乍ら嶮しく切れているのである常に陰影の多いその山の北面には晴れた日もよく雲を宿しているが一朝雨降ると山全体がいやその峽谷全体が眞白い雲で閉されてしまふそしてその雲の徂來によつて到るところ襞の多いその嶮山が恰も靈魂を帶びたかの樣に躍動して見えるのである』と書いていられるが靈峰と呼ぶにふさわしい此の尾鈴を常に仰ぎこの山の產んだ水を飲みその水によつて成育する農作物に依つて生活する村民の中から牧水先生の如き歌人が出たのも或は當然の事かとも思われる。

勿論歌はその人の深い魂から生れ出て來るものであり先生の歌を見その一生を考える時先生が如何に自己の心に忠實でありそれが爲に又如何に自然を愛され人間を愛されていたかゞ判るのでありますが私は先生の樣に豊かな人間性を持ち眞に自己に忠實な生徒を育てていく事が私の使命であると考へ裏山の

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ

秋も霞のたなびきて居りと刻まれた歌碑のほとりから尾鈴を仰ぎ又振返つては秋晴れの空の下に明るく映へる坪谷中學校の校舍を眺めては誓を新にして居ります。

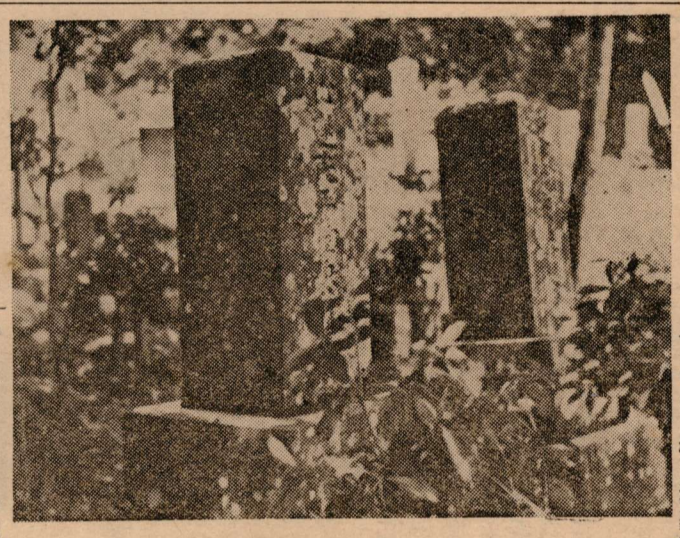
牧水の墓は坪谷にもある

陶山動

牧水のことの書いてある本をひもといてみますと、牧水は沼津で死去しましたので牧水の墓は坪谷にはないと思つていますが、實は坪谷にも祭つてあるのであります。そこでそれについての概要を申し述べたいと思います。

昭和三年の九月十六日牧水危篤の報が坪谷に參りました。そこで長姉のスヱ義兄の今西吉郎と筆者の三名が沼津に行くことになりました、筆者は子供の病氣が急に危くなつたので、（子供は牧水と同日の同時刻に坪谷の牧水の生家で死去しました）長姉と義兄とが沼津に急行することになつたのであります。

牧水は翌十七日に眼を落したので、葬儀を濟して二人は牧水の分骨を抱いて、涙のうちに歸鄕しました。さすが氣强い牧水の母も息子の無言の歸宅には眼に光つたものを浮べました。筆者はなつかしい生家で葬儀を行わんと母に申し出ましたが、それには及ばない自分が抱いて往くとのことで、そのまま佛壇に安置して毎日禮拜を續けて來たのであります。



牧水の眠るここに共と堂母生先

子が死去しますと母は非常に落膽したためか、急に身体も弱り昭和四年八月十四日八十二歳で死去したのであります。それで十六日葬儀をいとなみましたが、母の遺言の通り牧水を抱かしておくつたのであります。

牧水は生家の西の石原の墓地に母と共に安らかに眠つているのであります。

現在墓標面には母の戒名だけしかありませんので、多くの人は坪谷には牧水の墓はないといつているのであろうと思います。

牧水と酒

矢野團治

「團治やん、今夜こそおめえの底力をためそう」

大正十三年の春牧水先生は十一年ぶりに長男旅人さん（當時十二歳）を伴つて故郷坪谷へ歸られた。先生のふるさとの尾鈴の山の歸省を知つて鹿兒島よりいち早く馳せつけて來た創作社友の連中を先生と共に青島まで見送りその歸途都農町の河野佐太郎氏（今は故人）先生の姉婿宅の雛祭りの祝宴へとほされた。その夜こそ一晩中ゆつくり先生と飲み明して全く私の酒量の底力を試めされたわけだ酒といえば世の大方の人々は先生を大酒豪家であつたかとみている樣である。尤も先生は酒はたしかに好きではあつたが、然し一般の人々のみる樣な酒豪ではなかつたかと私は思ふ。先生は常に酒を愛し一人靜かに醉ふことをひたすらこの上もなく好まれていた樣であつた。

○かんがへて飲みはじめた
　る一合の二合の酒の夏の
　ゆふぐれ
○時をおき老樹の雫おつる
　ごと靜けき酒は朝にこそ
　あれ
○酒のめばなみだながるる
　ならはしのそれも獨りの
　時に限れる
○酒飲めば心なごみてなみ
　だのみかなしく頬を流る
　るは何ぞ
○われとわが惱める魂の黑
　髮の撫づるとごとく酒は
　飲なり

酒の歌は數多く殘されているが以上二三の歌をみても先生の（ロ）中にはぐくまれる酒、悠久なる大自然の中に身も魂も酒と共にいと靜やかにとけ入るさまにふれることが出來よう。

先生逝きて既に二十有余年古松院仙譽牧水居士の靈は靜かなる沼津の千本松原の白砂に打ち寄せる波の音を聞きつつ酒の香をふくみ深い眠りをつゞけよう。

牧水顯彰会々則

第一條　本会は牧水顯彰会と稱し事務所を東郷村役場内に置く

第二條　本会は歌人若山牧水先生の偉業を讃えこれを顯彰するを目的とする

第三條　前條の目的を達成するため左の事業を行う
(一)歌碑祭
(二)生家並に遺墨遺品等の保存
(三)印刷物の刊行
(四)其他必要なる事業

第四條　会員は本会の趣旨に賛同する者を以て組織する

第五條　本会に左の役職員を置く
(一)会長　一名
(二)副会長　二名
(三)書記　若干名
(四)評議員　若干名
(五)顧問

第六條　本会の役員の任期は二年とする但し再選をさまたげない

第七條　本会の役職員は左の方法により選出する(一)会長、副会長は役員会に於て選出する(二)書記会計は会長に於て委嘱する

(三)評議員は總会に於て会員の中から選任する

(四)顧問は評議員会に於て推薦し会長が委嘱する

第八條　本会の役職員の任務は左の通りとする
(一)会長は顯彰会を代表し之を主宰する
(二)副会長は会長を補佐し会長事故ある時は之を代行する
(三)書記会計は会長の命を受けて本会の事務を掌る
(四)評議員は本会の事業に參畫し各種事項に就て協議する
(五)顧問は本会の諮問に應ずる

第九條　總会は年一回以上とし役員会は隨時に開くものとす

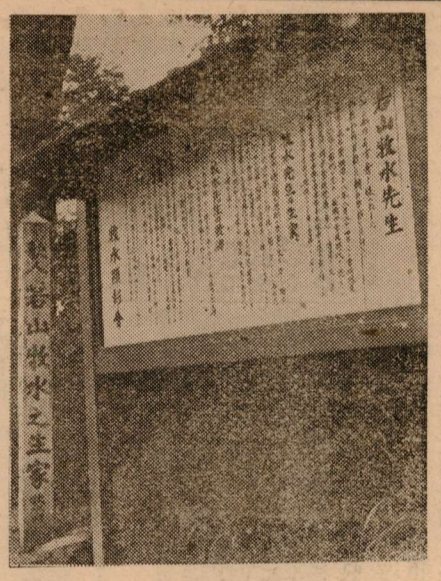
第十條　本会の經費は補助金、寄附金その他の收益金を以て充てる

附則　本会則は昭和二十六年九月十七日から施行する

若山牧水先生

【案内板】

生地に建てられた案内板
案内文は大悟法利雄氏作



おもいやるかのうす青き
峡のおくにわれのうまれ
し朝のさびしさ

若山牧水先生は本名繁、明治十八年八月二十四日、こ宮崎縣東臼杵郡東郷村坪谷三番地に生れ、延岡中學校時代から歌に志し、早稲田大學英文科卒業後歌道に專心して清貧の一生を送り昭和三年九月十七日、四十四才で靜岡縣沼津市千本松原の蔭の家に歿したがその流麗な數々の名歌は歿後いよいよ廣く愛誦されている

牧水先生の生家

先生の祖父若山健海は埼玉縣入間郡の農家の生れ、若くして蘭學西洋醫術を學び、天保七年ここに移り住んで醫を業としたが、嘉永二年蘭人モーニツケが我國に種痘（牛痘接法）を傳えるやいち早くそれを學んで日向各地に實施した先覺者である。牧水先生の生家であるこの家は弘化二年頃その祖父の建築したもの勿論その後度々の修理が加えられては居るが現在も先生少年時代の姿を殆んどそのまま傳えている。

牧水先生の歌碑

歌碑はここから約四十米すぐ後の小丘にあり、この庭内の生誕碑と共に昭和二十二年十一月十七日除幕式が行われ

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋も霞のたなびきてをり

の歌が先生の筆蹟で自然石に刻まれて居る

歌は歌集『みなかみ』所載のもので大正元年秋の作當時先生は父立藏病氣のために歸省滯在中であつたが故郷にとどまつて就職することを周圍から求められ進退に迷つて苦悶懊惱の日々を送つていた。そして先生は時おり家を出てはこの歌碑の石の上に登つてひとりぼんやりと尾鈴山を眺めたり、または瞑想や讀書に耽つていたりしたという。歌はそういう環境から生れたもので、尾鈴の山をかなしむ心はすなわち作者自身をかなしみまたいとしむ心である。

牧水祭にゆきて

黒木傳松

尾鈴嶺の紫いまも變らねば見てをり吾を生みし溪の秋
歌碑は大きく重き石目白の糞などもついて次第に年月がたつ
歌碑に酒をそそぐは誰が始めしや顏を拭く先生目に顯たぬにや
ふる里は聲あげて君を祭るなりああされど君の遙かなりし目
ふる里の集ふ子供ら聲あげて君を思ふ歌はなやげる舞
銀白の髮、にこやかに變らぬお聲時めぐり人の恩愛かへる
東京よりはるばる來まし吾々に老のにこやかの顏を見せます
熊本より百里來りてふる里の海に泳ぐに夕あかねさす
磯魚のいがめ俎板に美しく棟葉の散る濱の家の庭

書簡

夫人宛

（大正二年四月十三日坪谷に歸省中長男出生直前）

むらさきに藤がさいた
日光のちるやうに燕がとんできた
めじろとりに高い峰に登つていたらとほくの松林で今朝初めて蟬をきいた
どうしたのだいぶ念入りのやうだネー
四五日前に來た綠葉の手紙にはもう出來たやうにかいてあつただれが云いふらすのかもうみんな知つているね地方の投書家からさへそう云つてきたのがあつたぜ
手紙も來なくなつたやうだが病氣でもしてるんぢやないか
折返し身休のぐあいを知らすることを嚴命する旅費畫策の第一策が見ごとにやぶれたので大いにしよげたどうにかしてこしらへねばならぬ來月はどうしても出かくる
途中で瀨戸內海の小さな島にしばらく遊ぶつもりだうらやましいだろうそれから明石、大阪、京都、都合では東海道はよしにして若狹から能登越後の方から信州を經て上京しようかなどと考へてゐるこれは多分予想だけだろう。
五月の末に東京について早速家を借らなくちやなるまい
部屋借りがいいかいほんとうに夏になつたいまごろ生れる兒は然し幸福だネーたいへんいい子が出來るやうに思はれてうれしくてならないお前はおつかアさんになつてからが却つてよくはないだろうかと考へてゐる。よくおなりよ屆は出したよそちらにもすぐ廻して行くだろう。若山きし子君か、をかしいネこないだ云つたセルのひとへ待つてるよもうお前こちらは本當に夏だ雨のあとの今日の日和などときたらまつたくたまらない
今日は美々津から客が來る
筈だテーブルに棄櫻を活けたうんと飲んで歸鄉後初めての騷ぎをやつておふくろのど肝を拔いてやらうかとたくらんでゐる。
おふくろがたいへんお前に逢いたいさうだ是非こちらによび下せといふのだ少し金をとるくめんをして不幸なる老人に東京ぐらしをさせやうぢやアないかとにかく樣子を早くきかせろ待つてるだから
四月十三日　牧

愛兒宛

（大正六年十一月二十八日上總大原海岸帆待館より旅人宛（繪はがき））

喜志樣
おとうさん、おかアさん、兄さん、きりさんによろしく
眞日向のきりぎしの岩による浪のいまはつかれて煙りたるかな
とうちやんはこの家のこのせん。

友人宛

（大正十三年三月一日沼津市より東京黒木傳松樣那須琢磨樣宛（手紙））

坪谷にいんでくる
たよりはないか
ことに琢磨君はどうですあつたら遠慮なく云つて下さい。どうせ兄さんにも逢いますから多分こちら七日出發坪谷着は二十日ごろ
團治君はあちらにゐるのか知ら
歸るということが恐ろしい樣な悲しい樣な羞しい樣な氣がしてならぬそしてその癖どこやらうれしい、とにかく今度は年寄を引つぱつて來るその餌として旅人を連れてゆく
十何年振であちらの山櫻が見られるとおもふのが最もうれしい。冠嶽をもようく見て來よう。又江野下から船にも乘つて、美々津まで下る。船間の磯にも一時間でも寢て來ませう。おゝ神さま、どうか私に酒を飲ませずに下さい。
三月一日　牧水
傳松樣
琢磨樣

歌碑

隨筆

（夏）（の）（鳥）

山深く若しくは溪の奥深くわけ入らうといふのならば別
東京あたりの郊外にぶらりと杖をひいて聞き得る鳥の中では私は「ほほじろ」が好きである。
樹木ならば楢か櫟の落葉樹しかもそのおち葉に似た親しみをこの鳥は持つている。
漸く色づきかけた麥の畑中の徑をぶらぶらと歩いていると不意に頭の上の櫻の梢などから
一筆啓上つかまつりそろと啼くというこの鳥の寂深い聲が落ちて來る。驚いて見上ぐると微風にそよいで光つている葉がくれに矢張り落葉色したこの小鳥が靜かにとまつているのである。佇んで耳をすましていると今度は向うの丘の何やらの木の上でも同じのが啼いている。あちらがやめればこちらのがまた啼き初める。
遠く續いた麥のいろにもほか〳〵する地のほめきにも光り煙つている丘の上の雲のむれにも歩き疲れて何やら浮世なつかしくなつているわれ等のその時の心にもすべてによく調和してしみじみと耳を傾けらるる。
月並みのやうだが私は杜鵑も好きである
私はこの鳥を聽いているとずつと昔の太古の世界をふら〳〵と思い浮べる事が多い。たつた獨り此世に生れ落ちている樣な寂しさを感ずる事が多い。
夜はいやだ眞晝の雲が四方の空に輝いている時に聽くのが好きだ、溪間でもよい原の中ごしもよい
梟も好い
ゆふぐれまたは東明の寢ざめなどに思はずも聞きつけて心を澄ますことが多い
ひとつひとつ足の歩みの重き日の皐月の原にほほじろの啼く
わが死にし後の靜けきかかる日に斯くほほじろの啼き續くらむ
朝雲ぞ煙には似るこの朝けあわただしくも啼くほととぎす
暈帶びて日は空にあり山々に風靑暗しほととぎす啼く
たそがれのわが眼のまへになつかしく木の葉そよげり梟のなく
なきそめしひとつにつれてをちこちの山の月夜に梟の啼く

日記

延岡中学四年時代

一月一日　晴　暖
明治三十六年の初日愈々今日より起れり何となく心改まれる如きも興ありや獨立新聞來る廿四頁の大きさなり見る可きはなし。水花兄の歌出でたり畫より稔を伴い後山に山芋を掘り得る所三百五十目
一月二日うすぐもり寒風新年の賀狀來る事しきりなり風荒み空さえ曇りて予定の山芋ほりも叶はず、八犬傳など見る祿々として日を消す
春江兄より年賀狀の末に一首を添へ來る「歌になん讀みてや見むと思へどもあの清らけき朝日子の影」春江兄は頃日大内の姓をやめて鈴木とか云う親戚へ養子に行かれたりと

延岡中学五年時代

（卒業試驗のころ）

三月十六日　曇　雨
今日も變らず
氣は急ぐ仕事は手に合ふ所の事ならずぶらりからりすぐろ泣き度くも相なりぬ
野虹穗峰より送り來る中には會員の寫眞などありてよし、野虹會則活版で出來上れり立派、國文法英語物理修身さてさて忙しさよ
空もあはれみ給いてか雨
三月十七日　雨
とうとお出であそばしぬ修身やゝ可なりさあれ教科書もたずでの受驗なれば諸足ならぬはもとよりの覺悟物理七題のうち三題どもはあたつた事なるべし歸つては翌日のにはかごしらへ自暴が大勇氣となりてエツソ何もせんで實力でやつて見るさ十時までのおつとめつらし
三月十八日　雨
國西法やゝ可し之れ亦本持たずの受驗なりき英譯思つた程にもなかりしも出來たでもなし幾何大の强敵落第はせぬならしいよいよ糞膽を据えて自然に任すとなむ威張る
三月十九日　曇
今日命の瀨戸際になむ侍る國語可なり
三角さすがに强敵わが軍全く利あらずさんざんの体たらく自ら弔はむのみ
英（文法、作文）泣顏に蜂とは誰が云いそめし三時間といふにまづ膽を冷やして小さくなつて居るにかてて加へて難問七題十二時の下瀨彈丸よりも有力それにあてられたではなけれど試驗前よりやゝ傾向ありし腹痛いよいよ加はり笹井先生に寶円や湯やらをいただいて飲む始末なりき結果中の所か病氣夕方回復

編集後記

▲牧水先生逝かれて二十六年、ここに御命日を迎え「牧水祭記念號」を發刊して先生の偉業を讃え且つ人間牧水を偲ぶことは先生と郷土を同じうする東郷村民の誇りでありまた榮光である
▲苦山喜志子夫人をはじめ先生に私淑する方知友の方愛弟子の方々から玉稿をいただき牧水先生の御生活の一とこまを描いていただいたことは誠に有難い
▲「牧水先生の一生」は大悟法利雄氏著「牧水先生と郷土」より、「隨筆」「日記」「書簡」は「牧水全集」より拔萃したもの
▲この記念號にもられたすべての記事は先生を追憶するに充分なものばかりである。御一讀を乞い併せて文化の聖地東郷村を讃えよう